

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	Stigma toward psychosis and its formulation process: Prejudice and discrimination against early stages of schizophrenia
別タイトル	精神病に対するスティグマとその形成過程:統合失調症早期段階に対する偏見と差別
作成者(著者)	馬場, 遥子
公開者	東邦大学
発行日	2017.03
掲載情報	東邦大学大学院医学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨. 64.
資料種別	学位論文
内容記述	主査: 西脇祐司 / タイトル: Stigma toward psychosis and its formulation process: Prejudice and discrimination against early stages of schizophrenia / 著者: Yoko Baba, Takahiro Nemoto, Naohisa Tsujino, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Masafumi Mizuno / 掲載誌: Comprehensive Psychiatry / 巻号・発行年等: 73:181-186, 2017 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第831号
学位授与年月日	2017.03.28
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD81347266

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

馬場遥子より学位申請のため提出した論文の要旨

学位番号甲第 557 号

学位申請者 : ば ば よう こ
馬 場 遥 子

学位審査論文: Stigma toward psychosis and its formulation process:
Prejudice and discrimination against early stages of
schizophrenia

(精神病に対するスティグマとその形成過程: 統合失調症早期段階に対する偏見と差別)

著 者 : Yoko Baba, Takahiro Nemoto, Naohisa Tsujino, Taiju Yamaguchi, Naoyuki
Katagiri, Masafumi Mizuno

公 表 誌 : Comprehensive Psychiatry

論文内容の要旨 :

【目的】精神疾患に対するスティグマは、現在も根深く存在している。最近では精神疾患の早期介入の重要性が報告されており、未治療期間の短縮が予後を改善する可能性が示唆されている。更に予防という観点から、発症前段階である精神病発症危険状態 (At-risk mental state ; ARMS) の概念が注目されており、この時期から介入することで、発症後の予後の改善のみならず、発症の遅延、更には発症自体を予防するという点で好ましい結果が示されている。しかし、スティグマが受診行動や援助希求行動の妨げとなり、早期介入を困難にしている可能性が指摘されてきた。より早期の介入をめざし、精神病を発症前段階からの病期で分けて各段階のスティグマを調査し、その形成過程を検討し、未治療期間の短縮へ向けた知見を得ることを目的とした。

【方法】対象は、一般市民 (一般群)、精神科通院患者 (患者群)、精神医療従事者 (医療者群) とし、精神病様体験 (Psychotic-like-experience ; PLE)、精神病発症危険状態 (At-risk mental state ; ARMS)、統合失調症、うつ病の仮想症例を提示し、スティグマの強度を調査した。なお PLE とは、奇妙な感覚や出来事といった、一過性の幻覚や妄想様の体験を指す。最近、スティグマ低減の目標は、知識の増大や態度 (偏見; Prejudice) の改善だけでなく、実際の行動 (差別; Discrimination) の改善にあると言われている。そこで今回我々は、スティグマを偏見と差別に分けて評価することとし、偏見のスケールは、Pescosolido らの研究で使用された尺度を修正したものを、差別のスケールは社会的距離尺度を使用した。各スケールの合計点

を、各回答者属性において症例ごとの4群間で、各病期において回答者属性ごとの3群間で比較した。比較には一元配置分散分析を用い、TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較検定を行った。

【結果】一般群149名、患者群97名、医療者群119名、計365名のデータを集計した。各回答者属性において、4つの疾患の「偏見」の合計点を比較したところ、一般群では、PLE(40.87±9.84)が最も低く、次いでARMS(49.54±7.17)、うつ病(51.66±8.62)、統合失調症(53.76±7.85)の順で偏見が高まり、PLEと他の疾患において有意差を認めた。患者群では、PLE(44.83±9.01)が最も低く、次いでARMS(48.31±7.64)、うつ病(49.39±8.15)、統合失調症(51.33±8.36)の順で偏見が高まり、PLEと他の疾患において有意差を認めた。医療者群では、PLE(41.20±8.02)が最も低く、次いでARMS(45.56±6.02)、うつ病(45.81±6.56)、統合失調症(50.04±7.03)の順で偏見が高まった。ARMSとうつ病の間には有意差を認めなかった。各回答者属性において、4つの疾患の「差別」の合計点を比較したところ、一般群では、PLE(19.07±9.03)が最も低く、次いでARMS(26.58±10.06)、うつ病(29.68±9.57)、統合失調症(33.43±9.76)の順で偏見が高まり、全てにおいて有意差を認めた。患者群では、PLE(19.70±9.19)が最も低く、次いでARMS(24.32±8.65)、うつ病(25.79±9.37)、統合失調症(28.77±9.77)の順で偏見が高まり、PLEと他の疾患において有意差を認めた。医療者群では、PLE(19.90±8.66)が最も低く、次いでARMS(24.03±8.93)、うつ病(24.78±8.03)、統合失調症(29.96±8.36)の順で偏見が高まった。ARMSとうつ病の間には有意差を認めなかった。続いて、各病期において回答者属性ごとの3群間比較を行った。PLEに関して、「偏見」は、一般群(40.87±9.84)、医療者群(41.20±8.02)、患者群(44.83±9.01)であり、医療者群と患者群において有意差を認めた。「差別」は、一般群(19.07±9.03)、患者群(19.70±9.19)、医療者群(19.90±8.66)であり、いずれの群間においても有意差は認めなかった。ARMSに関して、「偏見」は、医療者群(45.56±6.02)、患者群(48.31±7.64)、一般群(49.54±7.17)であり、医療者群と患者群において有意差を認めた。「差別」は、医療者群(24.03±8.93)、患者群(24.32±8.65)、一般群(26.58±10.06)であり、いずれの群間においても有意差は認めなかった。統合失調症に関して、「偏見」は、医療者群(50.04±7.03)、患者群(51.33±8.36)、一般群(53.76±7.85)であり、患者群と一般群において有意差を認めた。「差別」は、患者群(28.77±9.77)、医療者群(29.96±8.36)、一般群(33.43±9.76)であり、医療者群と一般群において有意差を認めた。全群において、重症度が上がるごとにStigmaが高まることが分かった。更に一般群においては、医療者群との相対比較を通して、PLEの段階では、偏見・差別共に低いが、ARMSの段階になると偏見が高まり、更に統合失調症の段階になると差別も高まるという形成過程を経ることが分かった。

【考察】ARMSの段階から偏見が高まることから、偏見の為に、精神病の前兆を自覚しながらも受診を躊躇し、ARMSの段階で受診に繋がらず、統合失調症の発症を未然に予防できない事態が生じている可能性が考えられ、統合失調症のみならず、その前段階であるARMSに対しても正しい知識の普及や啓発活動を進め、スティグマの低減に努める必要があると考えられた。

1. 学位審査の要旨および担当者

学位番号甲第 557 号	氏 名	馬 場 遥 子
学位審査担当者	主 査	西 脇 祐 司
	副 査	村 上 義 孝
	副 査	端 詰 勝 敬
	副 査	中 野 弘 一
	副 査	榊 原 隆 次

学位審査論文の審査結果の要旨 :

早期発見と介入が、統合失調症患者のアウトカムを改善することがすでに示されている。しかし、スティグマが受診行動や援助希求行動の妨げとなり、早期介入を困難にしている可能性がある。したがって、より早期の介入をめざし、精神病を異なる病期で分け、各段階のスティグマを調査し、その形成過程を検討し、未治療期間の短縮へ向けた知見を得ることを目的として本研究が行われた。対象は、一般市民（一般群）149名、精神科通院患者（患者群）97名、精神医療従事者（医療者群）119名の合計365名である。精神病様体験（Psychotic-like-experience ; PLE）、精神病発症危険状態（At-risk mental state ; ARMS）、統合失調症、うつ病の仮想症例を提示し、スティグマ（偏見、差別）の強度を調査した。偏見のスケールは、Pescosolidoらの研究で使用された尺度を修正したものを、差別のスケールは社会的距離尺度を使用した。各スケールの合計点を、各回答者属性において症例ごとの4群間で、また各病期において回答者属性ごとの3群間で比較した。結果として、偏見、差別ともに、点数はPLE、ARMS、うつ病、統合失調症の順に低かった。さらに、一般群においては、医療者群との相对比较を通して、PLEの段階では、偏見・差別共に低いが、ARMSの段階になると偏見が高まり、更に統合失調症の段階になると差別も高まるという形成過程を経ることが分かった。このことから、統合失調症のみならず、その前段階であるARMSに対しても正しい知識の普及や啓発活動を進め、スティグマの低減に努める必要があると考えられた。

過日行われた学位審査会では、以下のような多くの質問がなされた。すなわち、研究実施に至った背景の詳細、質問紙調査という方法論の限界、医療関係者の回答に生じるバイアスの可能性、教育年数が及ぼす影響、一般群のリクルート方法、スケールのスコア化の方法、統計解析手法の選択理由、性別や年齢によって偏見に差があるか、などである。これに対し申請者は、自身の研究結果に基づき確かな回答ができた。さらに、今後の研究の発展性や、本研究結果を踏まえた対策の可能性などについて、申請者は自分自身の考えを述べた。本研究は、スティグマという社会上とても重要だが、これまであまり検討されてこなかった課題に切り込んだ意欲的な研究であり、また、PLEやARMSといった精神病のより早期の段階をも含めた検討であることに学問的新規性があると評価された。以上より、本研究は精神神経医学分野において、重要な知見をもたらすものとして評価され、十分に学位に値するものと判断された。